

【中学生の部：厚生労働大臣賞】

「この夏一番の出会い」

福岡県・久留米市立城島中学校

2年 小川 歌恋 さん

夏休みの初め、家族と、父の友人家族とその方の別荘に行きました。大分県九重の山中でとてもいい所でした。

その家族は、三人兄弟のお子さんがいて、一番下の十七才の方が障害をもっていました。Kさんと言います。ディズニー映画を踊りながらとても楽しそうに見ていたり、何度も同じ言葉を繰り返ししゃべったりしていました。後で、「ダウン症」と知りました。

初めは、どんな風に接しようかと考えてしまい一緒に遊んだり、話しかけたりすることができませんでした。Kさんも、私のそんな気持ちを悟ったのか、人見知りをした感じで私と顔を合わせようとしませんでした。しかし、時間が経つにつれて、私はKさんの礼儀正しさや、心の優しさを知ることになり、心の中の不安がとれ、お互いに自然と笑顔で接し合えるようになりました。

Kさんは、誰かが痛がったり困った顔をしているのを誰よりも先に気付き、心から心配されてるのが伝わってきました。食事をする時も、人が作ったり、運んできたりしてくれるもの全てに対して、「おいしいね」「ありがとうございました」と、大きな、ハキハキした言葉で言っておられたし、誰よりも先に「いただきます」「ごちそうさまでした」も、一度も言い忘れることなく、きちんとされるのです。それを見て、私は、自分の今までの、ごはんを作ってもらってあたりまえのように思っていたことや、あいさつの仕方などを思うと、とても恥ずかしくなりました。

次の日の朝、いつもながら朝寝坊をしてしまった私でしたが、Kさんは、何度も私の所に来て、声をかけられていました。その時は、誰かに頼まれて起こしにこられたのだろうとしか思っていませんでしたが、後で母に聞いた話は、Kさんは、私の体調が悪いのではないかと、もしかしたら死んでしまったのではないかと、心配して様子を見に来てくれていたのだという事でした。それを聞いて、何度も来てくれていたのにいつまでも起きようとせず、寝ていたことを申し訳なく思いました。

帰りに片付けをしていた時も、掃除機のコンセントを、5分あまりかけて差し込んで下さったり、布団を何度もたたみ直しながらもやっ和下さったりと、自らすすんで手伝おうとして下さっていました。こんな風に人の為になにかを一生

懸命努力したことが私にはあっただろうかと、心からの反省と尊敬の気持ちを抱きました。

帰りの車内で、Kさんのお母さんが、私の母に話していたことが、私はとても心に残っています。

「この子が生まれた時は、毎日泣いて暮らしていたんだよ。こんな体に生んでしまって申し訳なくてね。でもある日、私なんかより、この子の方が辛いはずなのに、泣いている私を笑顔で励ましてくれるし、一生懸命に生きていることに気付いて、泣くことこそこの子に対して失礼だと思ったよ。この日から私は泣かなくなったし、子育てが楽しくなった」という言葉でした。

この言葉の通り、この家族は、みんなで、Kさんを大切に大切にしているなあと感じました。Kさんが生まれてきてくれたことに、今は神様に感謝しているんだとも話してくれました。その訳の一つは、「この子のおかげで家族が一つにまとまっていてとても仲良しなのよ」と、とても素敵な笑顔で、そう私に教えて下さいました。

今回の旅は、楽しかった思い出以上に、私を人として成長させてくれた旅だと思っています。生まれてきた事は、それぞれがちゃんと意味があり、一見、幸せだと思えないことでも、実はその逆で、それをこんな風に誰よりも幸せなことだと思って過ごしている方々がいるということを知ることができました。

この家族と出会えて私はとても幸せです。